

視点を鍛える＝どう生きるかを考える

1月22日、文化ギャラリーで7日から30日まで開催した写真展『そこに ある』の作家・渡邊真弓さん（北海道カメラ女子の会代表）のトークイベントを開催しました。この展示は、



渡邊さんが5年前から展開しているテーマをゼロから再構築したものの。タイトルどおり、そこにあつたものとの出会いに感謝し、撮影した作品たちです。「同じものでも、人によって見方は違う。写真は自分の視点を切り取って他人と共有する道具」という渡邊さん。「視点を鍛えるのは、どう生きた

いですか？という事と一緒に。より良く生きるには日常を大切にすることが大事。当たり前なことは見落としがちだが、カメラを通して自分に大事なものを意識できているか自問自答する。そうして、見る人に針の穴くらい『何か違うな』と思わせるものが作品になる」という考え方に、来場者の多くが共感。また、展示をギャラリースタッフと一緒に作ったからこそ「具体的にどうすれば良いか迷うことも現実化できた。写真展は写真家一人じゃできない。みんなで行くことで、想いはもっと増幅する」と再確認できたそうです。展示の裏側にある様々な想いや創意工夫を知ると、より深く視られますね。

「自分の写真」を見つけてみよう

2月11日、文化ギャラリーで「写真のセレクト&プリントワークショップ」を開催しました。毎年恒例の「ひがしかわ大写真展」メッセの前に、「もう一時間加えてより良い作品にしてほしい」「撮影後のセレクト（選定）やプリントがもっと身近になれば」という思いから、町地

域おこし協力隊の土居原翔司さん&村田麻実さんが企画。「何が良い写真か基準はないので、自分が良いと思うものに自信をもって。ただし、コンテストなら部門のテーマに合わせて、目的によって選ぶ写真が変わります」



▲小さくプリントしてセレクトする方法は、写真集を作る際にも用いられます。

「ヒマラヤ〜生きた旅」を意識する

1月23日、せんとびゅあーで大雪山アークイブス講演会「ヒマラヤへの旅」を開催しました。講師は旅する写真家・石川直樹氏。氏が世界を旅した



と思ったきっかけは、小学生の頃からよく本を読んでいたこと。「物語を体に取り入れるのは、その事を体験したのと同じだと思う。本の中で沢山旅をしたことが今の根っこになっている」と本に感謝。初めて旅をしたのは17歳の時で、インドでビックリする体験をしたことで「世界は本当に多様で、常識だと思っている事も沢山ある考え方の一つではないことに気づき、相手を尊重して付き合えるようになった」と、

本を飛び出したことで得た想いも教えてくれました。そんな氏が山に登り続ける理由は「自分が生きていることに意識的になれるから」。「普段は呼吸することを意識しないし、朝起きて食べて…と何となく生活しているが、高山では深く早く呼吸し、明日行動するために何を食べて何時間寝て…と一挙一動を意識的する。そんな生活を続けると、体の中身がすっぱり入れ替わって一度ゼロになり、生まれ直している感じがする」のだそう。私たちが現代社会で忘れがちな「立ち止まって意識する」ことの大切さを伝えてくださいました。

と土居原さん。今回は『印刷して飾りたいもの』を念頭に、自分が撮影した写真同士をトナーメント形式で選んでいきました。セレクトする過程は、自分が撮ったものを見直す機会にもなります。写真はこれを何度も繰り返しすることで上達する…とコツもレクチャー。

後半は7種類の用紙に実際にプリントし印象の違いを比較しました。自分のイメージに合う用紙選びも大事な要素で、例えば鏡面紙なら水面や夜景のきらめき、局紙なら柔らかさを強調するなどの効果があります。「選びたい写真を探す力と表現する力を強めて写真を楽しんで」と土居原さん。今後もこういったワークショップを開催予定です。